

第十二号 七月四日発行

東大斗争、欲中書簡集

諸君が面会を終つて帰つていく時
我々が

その背後にどれだけ熱い期待の
まなざしを投げかけているのかを

肌身で

感じて欲しい

第十二号 目次

次

一、六月二十三日	東拘より	柏崎千枝子	一
二、松浦兼一さんへ		一女子予備校生	二
三、六月五日	中野より		
四、六月九日	東拘より	夏月昭磨	四
五、六月二十四日	"	町井正夫(法斗委)	六
六、五月某日	"	小宮順一(北海学園大)	七
七、六月十六日	"	I君(法斗委)	九
八、救対通信		福本敏	十一
		情宣部	十三

六月二十三日 東拘より

柏崎千枝子

「眞に人を煽動する言葉、本当のアジを我々は求めている。獄中からの豊かな言葉を我々は求めている。」

獄中書簡編集諸氏はこう書かれている。

しかし私は、逆に問い合わせたい。

我々が今、この東拘で直面している現実は、果して言葉で現わすことができる様なものだろうかと。そして真に、言葉を、アシを、手紙を求めているのは、むしろ獄中にいる人間なのだと

いうことを、外にいる人達は、どれ程理解しているのだろうか

と。この気持は、私自身に対する痛苦な反省から生れて来た。

私が駒場の喫茶店で逮捕されてから、まだ二ヶ月しかたつてい

ない。たつたの二ヶ月しか。

だけど、私は、今ここでどうしてとらわれの身であることが、やはり苦しい。慣れてはならないことでの日常生活、そして決

して慣れることはできることの生活に、しかしやはり慣れ

ざるをえないという矛盾。それが私をキレギリに切刻んでいく。

だが、一月十八日、十九日に逮捕された学友は、そうした生活

も、はや五ヶ月目を迎えたのだ。そしてここには昨年の十月

二十一日で逮捕された学友もいる。彼等にとつては、もう八ヶ

月が経過している。

彼等に対しても私は何を言うことができよう。

だが、私はシャバにいる時、彼等の絶望がわからなかつた。彼らの苦しみがわからなかつた。そして、彼等がどんなに些細なことで、喜ぶかもわからなかつた。

勿論シャバにいる時でも彼等のことは絶えまなく、私の頭にこびりついて離れなかつた。だが私は、彼等が、どんなに無限の期待をもつて、シャバにいる私が、徹底的に権力に復讐することを望んでいるかを、決してわかつてはいなかつた。面会につても、自分はまたあの長い地道を通つていけば、陽のあたるシャバに出られるのに、彼等は再び暗い独房に戻つていかねばならないということが、どれほど彼等を苦しめるのかわかつていなかつた。

そして、一遍の決意表明の手紙が、どんなに短いものであれ、彼等を、どれほど喜ばせるかということを理解していなかつた。彼等を、どれほど喜ばせるかということを理解していなかつた。全て、何一つわかつていなかつたのだ。いやわかるともしなかつた。彼等をいつのまにか英雄にしたてあげ、自分とは、何か違つたとえらい人間の様に思い込んでいたのだ。これは、一番危険なことではないだろうか。

そして私は今ここで二ヶ月過して、漸く、彼等の気持のほんの片鱗がじわじわと、私の心に伝わりかけてきているのを感じている。僭越かもしれないが。

だが五ヶ月目を迎えた人の気持、八ヶ月目を迎えた人の気持が、どんなに激しく、深いものであるかを、私は恐らく何一つわかつてはいられない。だが、小くとも、わかるうと、努めている、と

いう点で、連帶という言葉の重味を、より感じとれるようになつたといふ点で、私は前とは、違つてきてゐると思う。

こういふ状況の中で私が獄外の諸君に言いたいことは唯一つ。それは、私が、シャバにいた時の轍を決して踏んでくれるなどいうこと。そして、我々の内心の声を、厚い壁ごしにではあれ、必死でわからうとしてくれということだ。

我々は今、日々復讐の刃をといでいる。その切先は、日がたつにつれ益々鋭く、益々激烈なものになつてきている。来るべき

日に、それは、帝国主義の心臓部を、もろにつきさすだろう。だが我々の来るべき日は、未だ現実のものとは、なつていない。

勿論これに我々は耐える。だが獄外の諸君には、日々が来るべき日であり、日々が斗いのるつぼの中にある。（勿論、我々と君によせる期待が、どれほど大きいものであるかわかつてほしい。そして当然へのことながら、それに全力をあげて、こたえてほしく。）

我々には、勿論、同情も慰めもいらない。ただ諸君の斗いの決意表明がほしいのだ。そして諸君が面会を終つて帰つていく時、我々がその背後に、どれだけ熱い期待のまなざしを投げかけているのかを肌身で感じとつてほしい。そしてその気持をほんの一言でもいいから、手紙で書いてほしい。私の斗いは、権力やマスコミが意識的に流している様に、決して過去のものではなく、しつかりと受けつがれて現在生々と進行しているのだといふ確信を、私はたえまなく持つていたのだ。この望みは、

ぜいたくだらうか。

私が獄中から書ける言葉は、これだけである。余りにも当たり前のことだ。だが、獄中書簡集を読んで、その余りにも立派で、素晴らしい言葉に眩惑されて、我々を英雄扱いにしたり、その言葉の裏にある苦惱を忘れざるような危険な陷阱に対する警告として、これを送る。これは恐らく、アジにはならないだろうが。

松浦 兼一さんへ

前略

今日六月十四日、友人と新宿の西口広場に行つていきました。

沢山の人、人……人。
活気がみなぎついて、何かを行動している（少くとも今の私にはそう感じられます）人達に対して、一種のまぶしさみたいなものを、強く感じ、何とも言えない気持でした。

東大闘争をテレビで見、その崇高なる精神、純粹なる魂に、共鳴した一人でしたが、親からの送金で現在、予備校に通つてゐる私では、精神面だけでの感激でそれを実行に移すだけの、勇気がありませんでした。

そういう時に「東大闘争獄中書簡集」を拝読し「松浦兼一」さんの（運動外におられる諸君へ、自分自身に向けられている意見の一つとして、聞かなければと思ひました。

私が一番、現在求めているものは、打算のない人を又、自分を

決して裏切らない純粹な魂です。

私は、今迄そういう信念のもとに生きて来ました。自分の夢、自分の信念、決して妥協せず、自己主張する事によつて、自分

といふ人間を否定されても、他人と自分とに誠実であつたという満足感だけで、決して後悔しないだろうと。

私は、「魅せられたる魂」のアンネットに強く影響されて、一時、超階級的になつていきました。

それが良くて悪くとも、あるがままの他人であり、あるがままの私なら、全て認めようと思いました。偽善は許す事はできませんが、物事に、良い悪いは存在しないし、全く自分の認識で判断するのだと、そしてそれが偽りのない姿であれば、認めようと思つていたのです。

でも、近頃判らなくなりました。科学、真理を無視する事になるからです。アンネットはやはり私の理想像ですが、思想の重要さをしみじみ感じます。

私はどうしても大学に入りたいと思います。

将来、夜間高校の教員になりたいと思つてゐるからです。それになる為には、支配者が、敷いた一本のレールを一時期だけ歩く必要があるのです。つまり予備校から大学に行くという課程においてです。私は常に社会変革の立場をとつて生きてゆきたいと思います。しかし今政治運動をやる事は私の夢を破る事につながるような気がします。

しかし、この緊迫した社会情勢に、目をつぶつている事もでき

ません。

考える事は行動する事であるという私の考え方と矛盾をなすからです。

でも受験勉強もしたい。このきびしい情勢の中で受験勉強のみに時を費すのは間違つてゐるのでしょうか? 正直言つて、予備校の方に現在心も体も奪われている感じです。

東大斗争に涙を流し感激し、強い憎しみをいだいた私が、現在下宿と予備校との精神的には単調なる日々を送つてゐるという事は、松浦さんの言われるように、自己に対する裏切りでしょうか? 現情勢の中で予備校に通う事も非常に勇気のいる事でした。しかし、本当にもう一度考えて見る必要があると思いました。

予備校にも全共斗という組織があります。みんなと話し合う必要があるのかも知れません。ただ単に、うらやましいという気持ち持つて一種の自己満足だと思います。本当に、うらやましいのなら一步でも近づくよう努力するからです。

松浦さんから見たら、本当にブル的な、人間にしか見えないかも知れませんけど、貴方の書いていた文章に強く感じるものがあり、全く幼稚な文で、失礼でしたけどベンを執りたくなりました。

明日は記念すべき六月十五日、血と涙の跡を踏んで前進しなければならないのでしよう。

常に、自己矛盾にさいなまれてゐる私にも、階級の意味はおぼろげながら判るのでです。

どうか体に気を付けて

頑張りぬいて下さる。

再見

六月十四日（1969 PM 12）

追伸

ナジムロヒクメツトという詩人知つてらつしやるでしよう
か？

もし、よろしかつたら送りたいと思ひますけど、彼も殆んど
獄中生活でした。

今、それ程ピンチでもないので買えます。

六月五日 中野 より

夏月昭麿

獄中書簡集楽しく読ませて貰つています。もつともブルジョ

アジーの魔手は、この我々の現在の所唯一の広場にも及び、所
々墨で消されて読めない所もありますが、でもそれは朋でそし

て心で読んでいます。

今日、二、三雑文を書いて見たいと思ひます。

①編集後記に書かれてあつた「言葉をパクル」と言う事、同感
です。ただ、斗いて決起しない者をアシリ倒す言葉はないか
といふ事。そういう意味で書かれたのではないと思ひますが、

かつこいの言葉で、又誰にでも訴える言葉で、人を斗いに引き
出すという事は、不可能であると思ひます。僕はやはり、政治
過程、経済分析を行い、そして、その人のある個人的位置を、
徹底的に見つめて行く中にしか斗いへの決起はないと思ひます。
でも斗いにたたない人は、結局その人が今の自分の存在に、な
にがしとも満足がある時は斗わないと思います。自分の場合で
も、あれこれ考えた後、最後は“やるしかない”という答えし
か、何故やるかという問にはかえつて来ません。

②長文の「家族論」の展開興味深く読みました。竹内芳郎が現
代の眼、六月号で「幻想共同体としての国家がなくなるために
は、いくらその幻想に体当りしてもダメなのであつて、まず何
よりも現実的過程としての人民の社会生活それ自体の宿す疎外
を克服してゆかねばならない。そこから、この疎外の元凶をな
している階級対立、精神労働と肉体労働との分業、公的生活と
私的生活との分裂の廃絶とかが日程にのぼつてくる」（傍点引
用者）と言つているが、その様な問題として家族は重要な問
題だと思ひます。労働力商品生産の場としての家族、そして市
民主主義の幻想の核としての家族・帝国主義的分業秩序はその
幻想の核としての家族をすら破壊しようとしています。「ムレ
と家族は分裂する方向に進む」と言はれていますが、共産主義社
会に於ける家族は一体どうなるのかという大きな問題、そして
そもそも人類史にとつて家族とは何なのかという問題があると
思ひます。モルガン、それを发展させたエンゲルスの「家族私
有財産、國家の起源」の一面性、それに対する裏返しの一面的

批判ーシュミット・ボアズ・マリノフスキ等々を乗り越え

る形で家族論・そして国家論への展開が必要だと思います。

(全共斗の中に文化人類学専攻の方がいられる様ですが、期待しております)

② セクトは無責任である。イデオロギーさえ信じればどうにでもなると言うのがありました。どうかと思います。もつとも長文の詩の中に言はれている様にセクトがノンポリに充分に応えられなかつたと言うのは否定的に総括しなければならない様に。ノンセクト。それは現在のアトム化された社会に於ける共同性に対する不信を表現するものだと思いますが、しかし、それは同時に不信をそのままにした単なる反撃でしかなく、あたらしい共同性をいかに作りあげて行くのかという建設的な面がぬけ落ちているのではないでしょうか。全共斗といい自由なる集団もその辺から再度とらえなおして見る必要があると思います。でなければ我々はいつまでも幻想の共同体の中でただおどつてゐるにすぎないと思います。我々の斗いはアトム化された幻想の共同体にかわる類を奪還する事であります。生き生きとした共同性を作る事にあります。前衛というのはその為の断固たる部分にしかすぎないのであり、実践的には疎外された部分でしかないのです。だからこそ、我々は「執行機関であり行動機関である(フランスの内乱)」行動委員会を作り出し、そこに新しい共同性を作り出していく作業をなしてゆかねばならないと思います。この様な作業を通じてはじめて、前衛(—あるいはセクトと言いかえる)

の止揚は語られると思います。

③ 六・七号合併号に「権力に対しては不斷に復の牙を磨いておくこと…怒りと憎しみの炎を高く燃え立たせておくこと…を忘れない事」とあります。そして別の人には、看守といつしかなれあいになり、笑つて話す様になつてしまふと書いています。前人の言う事は大変大事な事だと思いますが、後人の気持も又大事だと思います。直接権力と対面していると「本来はそんな事はありえないのだが」やはり、怒りを忘れてしまいます。あの乱斗服を着た機動隊を見ると怒りが身にしみて来ますが、こうして、獄中にある時、看守を見ても、巨大な権力をバツクにした弾圧者というイメージはなく、何か用事を頼んだ後など「ありがとうございます」と素直に出てします。ナンセンスかも知れませんが、僕はこの心を大事にしたいと思います。勿論、看守が強権をバツクに不当な事一出廷強要等一を行なえば断固斗います。そもそもここに入れられている事が不当なんだと言はれるかも知れませんが、

「ゲリラ戦において自分の殺した敵兵の横を進む時のあの一瞬の深いそして重い意味をこめた沈黙を死んだ若者にも僕は捧げたいと思います。」(六・七号)と書いた人と僕は同じ気持ちです。それは決つして感傷的という事で片づけられる問題ではないと思います。人間の自然の心だと思います。人間の解放を叫ぶ我々は、もつとも人間的であらねばならないと思います。ブルジョアジーの汚濁に満ちた心を、我々が少し

でも持つておれば、我々の斗いは一切が無意味になるだらうし、仮令斗いが勝利しーといいうのは単に政治権力の奪取の意味ーその時から我々の墜落は始まると思います。

人間的本心。それは観念論だと言われるかも知れない。しかし、唯物論といいう名のタダモノ論が多い事も事実であるし、過去の歴史の中で我々は革命の腐敗過程を見て來たし、今も見ていてる。

以上、獄中書簡集を読んだ感想をとりとめもなく書いて見ました。諸君の活躍を期待しています、共にこの場を我々の共通の広場にして行こうではありませんか。

ML派の場合、その主張があらわされてゐる資料がないから、「統一公判勝利のために」の中の「一八〇一九斗争の意義」(今井氏)を参考にするが、「東京の帝国主義大学解体」は、したがつて、学生・労働者人民権力の樹立と、その下への研究・教育の再編成を必然的に伴うものです。「東京帝国主義大学解体」の斗いは、研究、教育の人民による掌握をめざす、文化革命として、階級斗争の一環に組み込まれる必要があります。」(P22)のよう、非常に結果的にしか表現されていない。彼らの場合、毛沢東流の根拠地革命論を「大学」に直接的にあはめ、大学に於ける学生労働者の権力樹立と解放区樹立をめざし、その直線的延長線上に革命を夢想しているにすぎない。彼らの誤りは、大学を「帝国主義大学」か「人民大学」かと、

ノンセクト・ラジカルの花ざかりらしい様ですが、彼らが、ノンセクトであるが故にかわかりませんが、その主張が、文章化されていはず、はなはだ不明瞭である。

例え、「東大斗争は、帝国主義大学解体の“質”をもつた斗争に到達した云々」とか云われる如く、「東京帝国主義大学解体」なるスローガンは非常にムード的なあいまいなものでしかない。このスローガンは、昨年末、ML派によつてかかげられ始め、中核派が、「帝国主義大学破壊」とヒヨウセツしてきましたのだとと思うが、これら政治党派の場合、明らかに斗争スローガンとして掲げられていると思うが、これが、所謂ノンセクト・ラジカルの場合、斗争スローガンなのか思想のレベルの問題か、シンボルのレベルなのか全く不明である。

六月九日

前略

町井正夫

愛知訪米阻止斗争が断固斗われた様ですが東大でもかなりの検挙者を出しているとのことですから、小生はいたつて元氣ですから、そちらの方へ十分差入れをしてやつて下さい。東大斗争の方も、我が法学部をはじめとした試験の強行、そして、医学部の授業の再開強行にみられる如く、"baok to Normandy"へ着々と進んでいる様で、大変困難なことでしょう。

最近、時々読む雑誌等によれば、東大斗争は今や、いわゆる

シンボリックに単純に二者択一的にありわけ、スター・リニスト

まるだしのどちらの階級が大学を掌握するか、利用するかとい
う視点からしかみれない点、更に個別改良斗争と革命斗争との
連関の把握の誤り、そして、最大限綱領主義。

従つて、東大斗争、就中一・一八・一九斗争の評価に關しても、
個別改良斗争の革命的推進ということが全くわからず、「あら
ゆる斗争は政治権力奪取まで敗北しつづける」とかいつて、

「革命的敗北主義」の名の下に、改良斗争の革命的推進の方向
性の提起を一切放棄してしまつてゐる犯罪性を彈劾しなければ
ならない。

一・一八・一九斗争が、「安田城の攻防戦」とか云々如く、軍
事力学主義的に肉体派的に自己陶すゝし、東大斗争の十二月し
一月の一定の後退的的局面を原則的大衆運動でいかにきり開いて
いくかといふ視点がなく、アーネスト・テイツクな武闘路線にお
ちいつてしまつたことを何ら総括せず、「東大斗争の意義」を
肉体派的に語る諸君を徹底的に批判しなければならない。まし
て、所謂「安田ショック」なるものを感じた陶山健一がそこか
ら「帝国主義を対況する労働運動」論なるものをうちだし、反
戦の労働者を石投げの物理的戦斗員と化して「首都制圧、官邸
占拠」をアジル姿は、バラノイア症も、ここまできたかと驚か
ざるを得ない。

ともかく、東大斗争の斗争形態が、全国の諸大学斗争に於て、
バターン化し、封鎖斗争の自己目的的傾向或いは「大学解体」斗
争へと歪曲されていくことを断固批判しなければならないだろ

う。

そして、今や「武装蜂起主義者」に純化したブクロ派等の「大
学を安保粉砕日帝打倒の砦に！」なる、大学斗争と、反安保斗
争の機械的結合論それから大学斗争の方針を「泥沼化」とする
ことによつて、斗争課題をあいまい化し、改良斗争の革命的推
進を放棄した「大学斗争の永続的泥沼化」を徹底的に批判しな
ければならない。

さて、情報過疎の拘置所では、今、僕らにとつて重要なのは、
これまでの斗争の徹底した総括と「あしたの為のその四一理論
武装」であろう。外界の皆さまは、自主改革路線粉碎・大学立
法粉碎の斗いと、反安保沖縄斗争の同時的推進に全力をつくし
て下さい。

分離公判も始まりましたが、僕の第一回公判は六月十六日で
す。既に、カルチエ・ラタン斗争組では刑訴二八六条の二による「欠席裁判」が始まつたとのことですが、これはともかく出
廷拒否で統一公判を獲ちたる決意です。

それでは皆さん、健斗を祈ります。
昭和四十四年六月九日

四・三

T君への手紙

小宮順一

六月二十四日

昨日の君の姉上を通じての差し入れありがとう。君が、今も、

全其斗の斗いを、厳しい状況の中で拒つてはいるということ、ぼくは二十日に出廷拒否を貫徹したが、君も又、監置処分覚悟の斗いを展開しているということ、改めて、感じられて、嬉しかった。

君とのわざか二週間の生活も、今のぼくには、貴重なものだつたこと、改めて感じられる。君の「ペスト」を一昼夜で読了し、「フランスにおける階級斗争」の中途にきた時、保釈許可の下りた君は、白い、きゅうくつな部屋を去つた……。

あの夜は、九時になる前に眠ることができた……何故だろうか。今、「ローラ三巻選集の第五分冊を読了し、Trotskyの永続革命論、そして、論文集「大学斗争」も再読の段階。

救対の学友の協力で六冊のロシア革命史（Trotsky）も読むことができた。どうにか、革命的共産主義者としての自覚も、

芽生えはじめ、パイになる……何時のことやら……時は、ゴリカンスキーになつていてことと思われます。けど、T君よ。そんな、ぼくが「フランシーノのばあいは」とか「愛するひとにうたわせないで」なんて、のを聞くと、熱い涙をこぼしてしまふことも知つてほしい。

T君。

あれから二度房を移りました。四・二八関係が入つてきたため等の理由で。一度めは入口の近く、うるさくて、まいました。今は、以前、君の居たらしい房の方です。まゝ内庭が見えることだけが、ちよつとしたすくいですね。

他の同志が云う「不惑症」「唾棄すべき日常性」というやつに、

ぼくもかかつてきました。二十四時間は苦痛ではない。何故か。唯……唯、決して雇しないという決意。

担当さんとの会話が、ぼく達の彼らへの、傾斜しやなく、ブルジョア支配の群の中に一人でも、二人でも、革命的共産主義者がボツンといることで、小さな核をつくり、彼らの心の中に達はできるのじやないか。

今、この数行前に、妹が面会にきた。奇妙な五分間だつた。とつても。ぼくは、妹の心の中にさえ、未だ、傾斜をつくりだしえていないのじやないのか……否。断じて否。五分間、金網、立会人。この全てを除去した時点にしか、「充分」な「解決」は彼女との中にはない。

T君

ひとりの白ヘルより。

「フランシーノのばあいは、あまりにも、おばかさん……。」君は、今、権力の前に、「保釈中」という札をぶらさせて、裸のままでいるのだろう。けれど、ぼくは、今、はじめて、革命という大きな：何と表現すべきなのか……。革命の唯中に自分の身をおくことの恐ろしさと素晴らしさを肌で感じるこ

とができたようです。

「死」を人民の、新しい時代のために「死」を喜こんで、むかえいれよう。

ぼくを愛する同志のために、ぼくが愛する同志のために。それが、熱い涙で、報いられるなら、ぼくと同じ同志のために、人

民の長い悲しみの行進がつづくなら。

流刑と亡命が、決して変革の主体としての、全ての新たな前進を生みだしたわけではなく、血みどろの死斗が、決して正しい道をさし始めたわけではない。そのような歴史をぼく達は、既に重苦しい経験として持つてゐるのだ。

誤ることのない正しい道を、ぼくは歩んでいかなくてはならぬ。

もう札幌の街は、ライラックのむせるような香りで、うずまつてゐると思います。

美しい六年の札幌。

短かい手紙で申し訳ない。けど、時間がないのです。

五月某日

I (法斗委)

暑い五月の昼下り、最近、△手▽に何かをもつて対象的活動を行なうといふ極めて「人間的な」行為と疎遠至上、今、「運動」なるもの、終えたばかり、手がギゴチなくて悪筆すみません。

二月頃、無の地表から「生」が生じ、一体、この雪溶け后、

ヒヨソコリ芽を出した草は何となるのだろうと思つて、ずつと見守つていたら、漸く、五月の日射しが甘醇い新緑の樹々に照りかえす中で、淡いブルーのしようしや（漢字忘れた）な花を咲かせました。たしか「あやめ」かな？

一方、地上での、まさにこの自然そのものの生命行為である諸生物の営みは一といつても、目のいい僕に見えるものはアリ君達

の活動のみ一盛んで、時折「見動きとれぬ幽囚人のおびきよせる」えさを求めてまんまと跌格子窓に近づいてくるトン馬なアリ君が、「僕」の格好の「遊び友達」となる次第。こんなこと書けば、誰かさんが『「人間て」「自然（他生物も含む）』に対してエゴイステイツクだ』なんて可愛い眉をしかめそうです。が、「あくなき、自然に対する知的好奇心」を実践的に貫徹させんとしているこの「閑人」のムゴイ実験によつて、時折、アリ君の水泳耐久度、触角喪失後の方向感覚。。。なる、眠精流にいえば「自由な学問研究の現状革新性（メデタクも科学それ自体は、人民の為になるといふ民主的学者の免罪符）」が、日々「人間」の為に、行なわれているのです！

やつぱり、アリよりは、雀君の方が、人類に親しき関係なので、からかうのが楽しい。上手になつた鳴きまねでおひきよせると、彼氏達？「何ぞや良き事あらん？」と思って、或は、「可愛い子ちゃんが招いてるのだ」といたく思い込んで、くりかえし、窓格子の僕の鼻先程の所まで、ジヤンピングしてのぞきこむのは、本当におかしい位です。

ああ！僕の（或は他人の人達も？）ささやかな「楽しみ」暴露しちやつた。

いや、まだあるんだよ。

いくら、シヤバ（又、漢字忘れた）より、「時間」があるからといつて、実は、勉強なかなかはかどらぬことが判りました。小説類らしいのです。つまり、人間的諸活動の貧困故、特に「言葉」—その明確な現実的、対象化行為としての「言語」

「文字」表現として遂次整理しえぬ為、頭脳の中で、ただ混沌と未整理で吸収されがちな為です。だから、ここで、意識は、段階的にといふよりは、散列して内にとりこまれていく。恐らく、「生き急ぐ」の著者がそうだつたように、いづれ、たぐりよせるよう、或は一気に、あわれでようとする諸々の△情感▽を、ことばに整理していくかねばならないでしよう——だけど、本当に「今」は、とてもボレとしています。

自己の目を、鋭きすまされた意識を、その奥底まで沈下させること、そこから再び、全世界を対象化すること。限定された諸活動は、一限定された、従つて部分的、一面的な制約の感受・苦痛・桎梏の意識は、一まだ△地方的▽存在を、△地方的▽反逆をしか生まない。それは決して、この疎遠な、自分の人間的感性にとつて敵対するこの全世界を、全体性を自分達に奪還するまで止めない——とまではいかない。それなしには自分の人間的、全体性がない——とまでの対象的活動への欲求を生まない。何のも、アブリオリに、又は、現存するものは全て人間にとつて無意味な、関わるに足らぬ、ナンセンスなものであるというものはない。それは、逆倒して或は屈折して、従つて、関わる中で桎梏と感じ、のりこえるものとして「現存」している。

人は、確かに、日々の生の中で、あれも、これもと「活動」しえず（関わりえず）勿論、だから、人間の全的発展とは、皆が「レオナルド・ダ・ビンチ」のようになることではないけれど、人が、様々な人間的活動に関わりうる契機といふものは、少

なくとも、その「地方的」限界、制約をこえようとする人間的契機もある。（豊かな生産力の解放と世界史的結合は各人にそれの物質的保障を与える）

まず一つのこと：前々回、奥浩平の言葉をかいだね。あのことは、僕達の人間的活動論にとつて、まづ、のりこえるべきもので。人間の人間的全的活動の尊遷 人間的感性の解放と結合（新たな社会性で結ばれた諸囚人——それは、例えば宗教的疎外（キリスト教の「愛」概念、アガベーとエロスの二元化）の止揚でもある）とは、彼岸事に達成されることでもなく、又、現在的に全的にあるのでもない。だから、僕達にとつて大事なのは、「解放をかちとるはずの活動」へこういう問題のたて方がすでに済平的ですが）、「新たな疎外」を生むという場合、それは何故か。次にとりあえず同じことの側面として、我々のかちどる、又は、日々の活動△生の中で、生みだされていくものは「地方的」人間ではないということです。ひからびた廢滅した、天国を夢みて実は自分は日々「限定づけられていく」人間となるのではない。このことは、これまでの全M・学生Mの総括として、僕達が出発から提起していしたものだとおもいます。次のこと：上のことの具体的なものとして、僕自身、考えてきたのは、例えれば「演劇をする人間」があり、「いわゆる活動をやる人間」がいるということは、どういふことなのかといふ問題でした。それは、究極は、人間的諸活動の分業下における自己疎外といふものの止揚の問題だと思いますが。はたして、この社会でこれ以上「演じる」ことが必要かどうかといふこと

これは逆接的ないみをも含めて、僕達は例えば安田講堂で、演

じたのではないか、それは「演劇」の止揚の問題を、已には
らんないかどうかということ。

何故、こんなととかいたのかといえば、君のくれた「愛奴」
のパンフは演劇のことと、もつと、いろんなことを話してみた
いのだけど、「提起」だけにします。

ごめんなさい。十頁の下段の所のことも、きっと、君が（僕
も）日々、疑問に感じる、或いは、確認している僕達の課題だ
とおもうから、書こうとするのですが、「今」はまとめる時間
がないのです。（つまり、「活動」で、かかる人間関係、家
族関係、男女関係等々は一つの実践的止揚の様々なる契機
なのだし、更に、共同体というものを決して固定してはならな
いということ。特に、これからつくりあげていこうとするもの
に対し、或は、君が人間関係のことを「共同体」という場合に…）
このことは、責任をもつて整理します。
P・S・ムスケル活動への固定化を、単純肉体労働への
疎外だなんてよくいいあつたものですが、そういう面もありつ
つも、実は大事なのは、各構成員が自分達の有機的全体を見と
おし、その中の不可欠の有機的部分は活動をになつてゐるとい
う意識でしよう。それは、ブルジョワ分業体系のように、それ
をになう人間は、抽象的なおきかえ可能な人間としてあるので
はない、かけがえのない個人として、全体と結ばれている。

拘 束 空 間

—よしもと たかあき批判— 福本敏

福本敏

福本敏

朝 僕はあるさとに喰いつこうとする
ふるさとの港に

不定期の貨客船が八〇〇〇トンを横たえる
そのキヤビンの白い壁と高いマストを
眺めている

僕は人ごみの中を歩いているのだが
それは神々しい森だと云える
悲劇の幕明けが近く 黒い髪を
束ねた女とその女の煙草の烟りが全部だ
珈琲を求める喉の渴きは
やるせないのだ

たつた五分間の中に
一切を凝縮しようとして

僕は表情する それは
かつての革命家にも似ない

そこには生への意欲がなければならぬ
が

睡り起き掃除する

食い 飲み 排セシする

眺め 読み

書きとどめでおこうとする

夏みかんの酸味は永遠のものだろうか

恋は不条理な三角形だろうか と

夕刻
僕は聞き耳をたてる

一九六九番！

僕はその声の中にあの

きやしやなファンシズム論の大家の

姿を浮べようとする

彼も確かに生きている

と叫ぶ僕の声に

彼は僕の秘めた思いを聞き出すだろうか

ためらいながら僕は叫ぶ

許された発「声」の機会を逃すまいとして

夕刻

日は傾き 花は枯れはじめる

タケシマユリとカアナイションの香りの中に

僕は存在する

花粉がコツブの中で旋回運動するように

僕は存在する

明日もまた 今日のように

八さりげないゝだろうか

我が革命家たちは

攪拌擂滑機の中で耐え切るだろうか

足をすりつぶされ

腰をくだかれても

一步前へ出ようとするだろうか

八冬眠した金魚の眼に挫折する▽

だろうか

僕は23回目の夏にむけて

夢想を繰り返している

(注) ▲:▽内は吉本隆明の詩より引用

詳細は知らず

救 对 通 信

情 宣 部

六月二八日から二九日にかけて全共斗救対で裁判斗争に関する
合宿を行なつた。
欠席裁判をどうとらえるか、これからの裁判斗争をどう展開する
か、等の討論をするなかから、救対としての方針らしきものを
出したので、獄中の同志諸君、そして在宅の被告である同志諸君
の判断の一助にしたいと考える。

欠席裁判は我々の斗いの敗北を決して意味しない。むしろ分離
公判粉碎斗争がひきだした斗争のより発展した段階であること、
我々は権力が欠席裁判という、階級支配の本質を赤裸々に示した
形でしか「裁く」ということを行ないえなくなつたことをむしろ
我々の武器とすべきである。ブル新でさえ異常な裁判としてとり
あつかう欠席裁判を、欠席裁判でもつてまで分離裁判を強行しよ
うとしていること、その不当性と分離裁判の真の狙い（眞実の陰
蔽による階級的断罪）を暴露する斗いを大衆斗争として行なわね
ばならない。獄中同志の出廷拒否も、単に分離裁判に応じない、
という受身的な位置づけから、攻撃の武器としての出廷拒否に転
化できるようにしなければいけない。そのためには、獄中からの
創意工夫をこらしたアピール、救対を中心とした出廷拒否に関する
情宣の強化をすること。保釈された同志は再拘留されるような
行動はとらないこと。拘留 자체が判決なき刑の執行であるし、權
力に奪われた同志を早期に我々の手に奪い返すこと（第一義で

はないが）重要な任務であるし、分離公判粉碎の斗いが出廷
拒否という手段でしか貫徹できないというわけではなく、保
釈されたものは独自に粉碎する斗いの方法を工夫する必要が
あること。早急に被告団を結成し、粉碎斗争を手工業的では
なく、被告団として戦術をたてると同時に、今後被告自身が
裁判斗争を担う情宣、涉外・敗政等の活動を起していくこと。
法廷における斗いは、保釈者は再拘留されない程度ぎりぎり
の斗いを行ない、審理をさせないこと、欠席判決は今まで反
省組に対して出された判決とそれほど大差はなかろう。つま
り反省組は起訴事実を認めたのであるから、権力にとつても
欠席判決が他の判決より特に変つたものとして出すのはこま
るであろうから、むしろ判決まえに職権保釈でもして法廷に
引きずり出し、欠席判決ではないといふ印象を与えるようとす
るのではないか。しかし、保釈されても我々は分離公判は認
めないから断乎審理拒否を貫徹すること。我々は欠席裁判を
出廷拒否を我々の武器として有効に使うかどうかが公判斗争
の発展を左右するものであることを確認する必要がある。そ
の点獄中諸君の効果ある創意工夫をいろいろ提起ねがいたい。
我々は今回の裁判斗争、とりわけ分離公判粉碎・統一公判
獲得斗争を東大斗争の本質を人民に明らかにする場合ととら
える。法廷における意見陳述というより、権力が分離公判・
欠席裁判という攻撃をしけてくるのに、我々が統一公判を
掲げて斗うこと自体が巨大な情宣であるととらえる。そのこ
と自身が人民に裁かれるべきなのは権力であり東京大学当局

分離公判粉碎日程表

月 日	時 間	法 廷	グ ループ名
7・7	10時	703号	安 田(13)
"	?	501	" (17)
8	10	?	" (18)
	1	703	" (10)
6	10	502	" (7)
	"	703	ラグビー場(2)
	"	506	" (3)
	1	702	" (1)
10	10	506	法 研(少年)
	"	703	安 田(2)
11	10	701	法 研(5)
12	1	303	
14	10	703	安 田(4)
15	10	701	" (8)
	"	501	法 研(1)
	"	703	安 田(3)
16	10	501	" (17)
	1	"	" (1)
17	10	506	列 品 館(2)
	"	702	安 田(20)
	"	501	" (17)
	1	503	" (12)
	?	501	" (1)
18	10	701	法 研(3)

毎朝9時半

東京地裁前に集合せよ

であることを勇弁に語ることである。そして我々はもう一つ、今回裁判斗争を七〇年にむけた治安対策（大学立法・外国人二法・防衛二法等）の一環として円滑に大量の処理を図る体制の完成をねらう治安・弾圧裁判ととらえ、これを断乎粉碎する斗いを大学立法粉碎の斗いとともに全都全共斗、全国全共斗の斗いとしてとりくむよう提起する。七月十日ごろの全都全共斗第三波斗争にとりくむようにするし、同じ頃労働者市民向けカンパニア講演会をもち、七月二十日頃に再度五・一〇集会の様なそれをうわまわる治安裁判粉碎の大集会デモを行なう予定である。

獄中の同志諸君、諸君らの斗いは七〇年の突破口を開いた偉大な斗いであつたし、現在獄中における出廷拒否の斗いが、それ自身七〇年にむけた弾圧体制に対する巨大な斗いであることを確認してにしい、そのような観点にたつて裁判斗争を断乎斗つてほしい。

不十分な点は多々あるが、以上が救対の方針のアウトライン（獄中斗争を中心として）である、批判を大いにしてほしい。より我々の斗いを発展させるために。

六月三十日

編

後

記

集

梅雨どきの重苦しい空気がぼくをつつみ込み、襲いかかる。汗がべトと肌にくつつく。厚く重苦しい雲群がのしかかり、銀杏の葉がそのためか一層暗く濃く縮み上がる。

死んだような本郷キヤンバス。暑い！

これから長く暑い夏が果てしなく続くような幻覚にふととらわれる。ふと昨年の今ごろを想いだす。

冷房つきの解放講堂。ぼくたちはそれを占拠する。ぼくは冷房付きの部屋を捜す。安らかな眠りと怠情なそして忙しい生活。△熱い▽夏。それから冬――ぼくたちは完全暖房つきの解放講堂から追放された。それからがほんとうの冬だつた。寒く厳しく長い冬。ほんとうの寒さがやつてきた。

季節はぼくたちと関係なしに回転する。又夏がやつてくる。暑い暑い夏。ぼくはその暑い夏に耐えられるだろうか？

暑い夏を△熱い▽夏としてわがものにするために、何をすべきか？
△熱い▽夏を再び奪還せよ！

△影
丸▽



文京区向丘一の十二の七 東大追分寮内
「ふりすむ社」（発送センター）
申し込み下さい。

パツクナンバー有。一部送料共七十五円（但し六・七合併号のみ百二十五円）購読料を添えて左記宛お申し込み下さい。
なお、定期購読御希望の方は、五五〇円（八号分）単位でお

銀行振込 第一銀行本郷支店 普通預金
加藤 五郎

（銀行振込 第一銀行本郷支店 普通預金）
加藤 五郎

第十二号 七月四日発行
発行者 「獄中書簡集」発刊委員会
加藤 五郎

△連絡先▽ 文文京区向丘一の十二の七
東大追分寮内
電話 八一一二三六八
真崎 猛哲
